

2024年5月26日 久宝教会 三位一体主日礼拝メッセージ

「手を離さないで」

水谷憲牧師

聖書 詩編 37編 23-40節

私事ですが、今月の3日に誕生日を迎えまして、53歳になりました。今年の誕生日には52歳を迎えまして、あたりまえですが、その時には「52歳おめでとう、52は『ごじゆうに』ですから、自分の気持ちを大事にして、自由にやりたいようにやってください」といったお祝いの言葉をいただいたりしたものでした。そして今年は53になったわけですが、果たして今私はご自由に生きている「ごじゆうさん」になれているかと考えた時に改めて「自由に生きるってなかなか難しいよね」と、今立たされている立ち位置を振り返って思わされています。いろんな周りのことを考えると、まあ確かに何でもかんでも自分の自由に、好き勝手にふるまえるような立場ではない、妻も子どももおりますので、自分のことだけ優先して考えてもいけないし、会社では上司も部下もおり、会社全体のことと考えて動かなければならない立場にもなっています。教会だって、必要だと言って下さり、助けて下さいと請われているところを無下に断ることなんてできないですよ。でももちろんそれはいずれも、自分が「わかった、しょうがねえなあ」と自分でそうすると決めたことなので、その意味では自分の気持ちに沿って自由にやっているということなのですが、ただその「自由」は、自分のやりたいことだけをやるか、周りのことも考えずに好き勝手にふるまうといったこととは違いますから、「自分で決めたことを自由にやっているから『ごじゆうさん』に生きているはずなんだけど、いやーそれもなかなか大変だよ」とつぶやかざるを得ない今日この頃であります。

先日、私の家の近所のスーパーで晩ご飯の買い物をしていた時に、30歳前後の頃、私が神学生だったか駆け出しの牧師をしていた頃だったかに知り合いだった友人とばったり再会し、「水谷さん、全然変わってないですねー！」って言うただきまして、高校を卒業して30年ぶりの同窓会でもさんざん同じことを言われたもので、「いやー中身も全然成長してなくてー」なんて自虐的に答えたりしたわけなんです。確かに時の経つのは何と早いことか、自分の中身は全く変わっていないようなのに、周りの時だけが見る見る過ぎて行ったような錯覚を覚えます。九州の高校を卒業した30数年前には、私がこうして大阪で牧師をしているとか、牧師になったばかりの20年前だって、今こうして精神障がいをもつ人と一緒に仕事しているとか、生野のスーパーで買い物をしているとか夢にも思っていなかったことを思います。

私たちの人生は、予測は不可能。まっすぐ進むつもりが横へそれることになったり、

全く違う方向へ進んだと思っていたけど、全体的にとらえ直したら、おおむね自分の目指していた方向へ向かっていたとか、無難に見える道を選んだとしても、必ず何らかの山だって谷だってあるのだということはすべての人に、すべての人の人生に共通してあてはまることと思います。見かけは全然変わっていないかもしれないけど、まあでもいろいろとありましたよ、これこれこんなにしんどいこともあったけれども、今思えばあれがあったからこそ、今の私があるわけで…といった経験は、皆さんもきっとお持ちなのではないかと思えます。生まれてから一度も辛いこと・苦しいこと、挫折の一つも経験せずに人生を終えましたなんていう人は、世界中探しても、過去を探してもどこにもいなかったでしょうし、これからもいないでしょう。物心付かない赤ちゃんであっても、自分で意識していないだけで、やはりお腹がすいては泣き、うんちをしては気持ち悪くて泣き、眠たくて泣き、さびしくて泣くわけです。赤ちゃんだって、無意識に苦しみを、ストレスを感じて泣いたりしているわけです。私たちだって、人生において、つらくて泣きたくなる時、苦しみ悩みに叫ばずにいられない時というものは必ずくる。たとえ私たちがどんなに清く正しく信仰深い歩みをなしていたとしても、苦しみや試練はそんなことお構いなしにやってくるわけです。

そして私たちはそれぞれの人生において様々な苦しみや試練に見舞われたりすると、こんな苦しみをなぜ神様がお与えになったのか、なぜ神様は苦しむ者を苦しめるままにして放っておかれるのか、文句を言いたくなることもあるでしょう。自分のことだけでなくともそうかもしれません。今や世界中に差別や貧困、争いが蔓延し、突然の災害なども頻繁に起こっています。そのために苦しんでいる人・悲しんでいる人を見て「神様は何してはるんや、神様が本当に居てるんやったら、何で戦争や差別を止めてくれないんや、何で苦しんでいる人や何の罪もない人の命を救ってくれないんや」と思うかもしれません。それは当然な、自然な感情でしょう。しかしその一方で聖書は言います。イザヤ書40章にはこうあります。「手のひらにすくって海を量り、手の幅をもって天を測る者があろうか。地の塵を升で量り尽くし、山々を秤はかりにかけ、丘を天秤にかける者があろうか。主の霊を測り得る者があろうか。主の企てを知らされる者があろうか。主に助言し、理解させ、裁きの道を教え、知識を与え、英知の道を知らせうる者があろうか」。ちっぽけでしょーもない被造物にすぎない私たちが、この世界を創られた神様のことを完全に理解することなんてできないし、また神様がなさること、あるいはなさらないことについて、あーせいこーせい、何であーしないんやこうしないんやと、とやかく注文をつけることなんてできないんです。もし仮に私たちが不幸に見舞われているとするなら、私たちは神様にその責任を転嫁するのではなくて、私たち自身の姿勢をまず振り返らないといけないし、今与えられているこの苦しみには神様のどんな意図が込められて

いるのだろうか、神様はこのしんどい出来事・悲しい出来事を通して私たちに何を伝えようとしておられるのだろうか、私たちに何を求めておられるのだろうか、と分からないながらも想像していくこと、もちろん口で言うほど簡単にはできないけれども、そんな姿勢が私たちには必要なのかもしれません。

今日は旧約聖書の詩編を一緒に読んでいるわけですが、23節によると、神様は人の一步一步を定め、御旨にかなう道を私たちそれぞれに備えて下さっているというんです。私たちが神様の備えて下さったその道から離れ、またその道に気づくことができていないから、私たちは出口の見えない試練に苦しむのかも知れません。しかしたとえその試練に出口がまったく見えなくとも、神様は私たちと必ず共にいて下さっているというのです。24-25節にはこうあります。「人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていて下さる。若いときにも老いた今も、私は見ていない。主に従う人が捨てられ、子孫がパンを乞うのを」。私たちが苦しみにぶっ倒れそうになることがあっても、神様はしっかりと私たちの手をとらえ、ある時には引っ張り起こし、ある時にはじっと手を握って私たちと痛みを共にして下さるのだ。この詩編の歌手は、神様により頼む人が倒れたまま放っておかれ、またその子孫までもが苦しむ様子を私は見たことがないと言っています。つまり、イエス・キリストが病気の者やのけ者になっている者に手を差し伸べたように、あるいは十字架上で「なぜ私をお見捨てになったのですか」と悲しみの叫びを上げながら死んでいったイエスを神様が苦しみつつ黙って見守り、しかし後に栄光の復活に与らせられたように、私たちの苦しみも、私たちがただ神様により頼み、イエスを私たちの救い主として信じている限り、決してそのままに捨ててはおかれない、きっと救い上げられるんだ、とこの詩編は歌っているんです。

主は正義を愛され、主の慈しみに生きる人を見捨てることなく、とこしえに見守っておられる、と28節においても歌われています。だから、主に望みを置き、主の道を守れ、無垢であろうと努め、まっすぐに見ようとせよ、とこの歌手はさらに励ましの言葉を与えています。苦しみにおぼれることなく、ただ神様がきっと道を備え、救い上げて下さることを信じるのだ、まっすぐに神様だけを見ていくんだ、という励ましの言葉です。40節にも「主は彼を助け、逃れさせてくださる。…主を避けどころとする人を、主は救って下さる」とあります。主に従う人、主の道を守っている人であっても、苦しみ悩み・不幸と見えることはきっと起こってきます。しかし、それはあくまでしばらくの間課せられる試練であって、永久にそのままではないはずで、主に逆らう者が横暴を極め、野生の木のように勢いよくはびころうとも、時がたてば必ず消え失せるのだ。苦しくて叫びたくなるような試練の中でも、神様は復活のイエスと共に最後には、必ず私たちに力強い支えと助けとを下さるに違いない。神

様は、神様に心を尽くしてすがる者を決して見捨てたりはされないんです。

「子育て四訓」という、子育てに関する 4 つの心構えのようなものがあります。私も最近初めて知ったのですが、ネットなんかでは山口県の教育者であった緒方さんという方が提唱されたものであるとか、アメリカ先住民の言い伝えであるとか、その由来ははっきりとは分からないようです。ともかく、その四訓にはこうあります。「乳児はしっかり肌を離すな、幼児は肌を離して手を離すな、少年は手を離して目を離すな、青年は目を離して心を離すな」。私も神様のことを分かっているわけではありませんけれども、でも神様は基本的に私たちをいつも乳児を抱くように包み込んで下さっているはずで、でも私たちからすれば、いつも神様がそばにいて私たちを抱きかかえて下さっているようには感じられないこともあるかもしれません。しかし少なくとも神様は、私たちの手をしっかりと握って下さっているはずで、私たちが手を握られていると感じることができないときがあったとしても、神様は少なくとも目を離さずに私たちを見守って下さっているはずで、仮に私たちが、神様が私たちを見守って下さっていると感じられないときがあったとしても、神様の心はいつも私たちのことを憶えて下さっているはずで、何でそんなことが言えるのか。私たちが神様の子どもだからです。ご自分の大事な子どもであるキリストを、身代わりとして犠牲にしてくださるほどに、神様は大切に思っただ下さっているからです。こんなしょもない私たちのことを。人間の親には、よい親もいれば悪い親もいる。いろいろですが、だからこそ私たちは、私たちの創り主、親である神様の愛情を信じてゆきたいと思うのです。人間の親はどうあれ、神様だけはいつも私たちのことをぎゅっと包んでくださっている。神様だけは、私たちの手をしっかりと握って、離すことなくつないでいてくださっている。神様だけは、私たちから目を離さず、いつも見守ってくださっている。神様だけは、いつも私たちと心を共にしてくださっているのだと。

今日は、三位一体主日と呼ばれる日です。それはつまり、ナザレのイエスの姿で肉体を持って私たちの間に降りて来られ、私たちの罪を贖った後に今や聖霊として働きかけて下さっている神様、3つの異なる姿を持っておられるけれども1人である神様のことを覚える日です。その三位一体の神様が、これからも私たちの手をしっかりととらえ、私たちを様々な試練から様々な形で救い上げて下さることを、私たちはこれからも強く信じるとともに、それだけでなく、私たちの方からもいつも神様に対して「私の手を離さないで下さい、私もあなたの衣の端をしっかりと握って離さないようにします」と祈りながら毎日を歩んでいきたいものだと思います。